

平成 25 年度 1 月例会レジュメ

日時：平成 26 年 1 月 17 日（金） 18：00～20：00 開催

場所：技術士会荻手ビル 5 階 AB 会議室

講演者：服部拓也氏（（一社）日本原子力産業協会 理事長）

演題：原子力人材育成の課題と対応

司会：岡村 章 副部長

参加者：27 名（講師を含む）

講演内容

1. 若者の原子力離れ

マスメディアの影響もあり原子力に対するマイナスイメージに歯止めがかからない現状があり、若者にポジティブな方向が示せていない現状がある。

H18 年から大学生向けに合同企業説明会を実施してきたが、H22 年の 3・11 を境に来場者が 1/4 に減少した。原子力分野専攻の参加者はあまり変化がないが、電気、機械系専攻の参加者は減少し優秀な人材の確保が困難になっている。

2. わが国の原子力人材育成に関する調査結果

わが国には原子力トータルで 4 万人の人材が居るが、人材は高齢化しており、技術の移転・伝承が課題である。原子力系の大学教育でも実験、実習した学生が減少しており、教育を受けた学生の約 40% の 200 名が卒業後原子力関係に就職しているが、産業界の求める人材と大学生のカリキュラムがマッチしていない。産業界では全体を俯瞰できる人材、技術士にも通じるいろいろな課題にへこたれない能力を持った人材を求めている。



3. 原子力人材育成ネットワーク

原子力人材育成ネットワークが人材育成を効率的・効果的に推進するために 2010 年 11 月に設立され、高等教育分科会、国内人材国際化分科会、実務段階人材分科会、初等中等教育支援分科会、海外原子力人材育成分科会の 5 つの分科会からなる。

4. 世界の原子力の開発動向

海外では福島での事故後も開発ペースの停滞は見られない。新規導入国は日本の技術に期待している。今後特に東アジア、東欧、中等、南アジアが伸びていく。

5. 日本の技術の強みと弱み

日本の一番の強みは建設プロジェクトマネジメント力であるが、弱みでは UAE で韓国に負けたように海外プロジェクト経験に乏しいことや規制に代表されるように世界標準でない技術のガラパゴス化等がある。

6. 人材育成に係わる各国の取り組み

ロシア、韓国、フランスでは原子力人材育成に取り組んでいる。日本ではこれから海外人材を教育することが課題となる。韓国では国内 50 人海外留学生 50 人を受け入れ韓国型原子炉の輸出戦略支援をしている。

国際原子力機関（IAEA）では、e ラーニング、マネジメントスクールに力をいれている。原産協会では世界原子力協会（WNA）が主催する夏季セミナーへの参加を支援。

7. 今後の課題と対応

今後グローバル人材として、コミュニケーション力、イマジネーション力、人的ネットワークを育てていく。原子力に情熱を持って取り組む人材が必要である。

【意見交換】

Q：産業界で技術士が活用されていませんが、技術士の活用を産業界ではどのように考えていますか。

A：アンケートをとると企業で最初に予算が削られるのが、人材育成である点、2 つ目は、日本の場合、責任を会社が背負っていて、個人が責任を負わない社会であり技術士のように個人に負うこと

はなく、全体に公平にする社会である等いくつかの要素が絡んで今に至っている。

Q：技術士制度を使って、人材育成をしていくことはどうですか。

A：産業界は「高み」を目指している。そういうシステムを作っていきたい。これが技術士と重なっていくと思う。

Q：マイナスイメージに歯止めをかける活動はありますか。また、個人の責任、能力というごく一部のエリートとその他といったイメージになる。

A：今は話しを聞いてもらえない状況であり、専門家が信用を失った状況である。

専門家は中立的立場であるべきで、原子力学者が御用学者といわれているので、これを建直さなければならぬ。信頼の回復が最大の問題であり、透明性、コミュニケーション能力の改善が必要である。今、夢を与えるテーマがないので、まず信頼を回復してからテーマを見つけていく。2点目の個人の能力と全体という点は、リーダーが引っ張り組織が活性化すると全体が良くなるという意味で、今、求められているのは強いリーダーシップ。



Q：原子力は若者に人気がなく、低線量被ばく等でも母親の影響が大きいと思うがどのようにお考えですか。

A：放射線に対するアレルギーがある。放射線の専門家が信頼をなくしている。福島では市町村で状況異なるが、粘り強く取り組む必要がある。隣接町村でも情報交換がされていないので地道な取り組みを少しずつ積み重ねていくしかない。リスクについて議論する場がないが、白、黒の議論ではなくグレーの部分を議論することに踏み出すことが必要。今まで、問題を単純化して議論しない歴史があるので時間が必要である。

Q：P21の産業界が求める人材像は技術士とラップするが、どのようにお考えですか。

A：社会が転換期にある。技術士が認められるのかという問題点をつぶすだけでなく、社会とのインタフェースの中で技術士について考えないと駄目である。

以上